

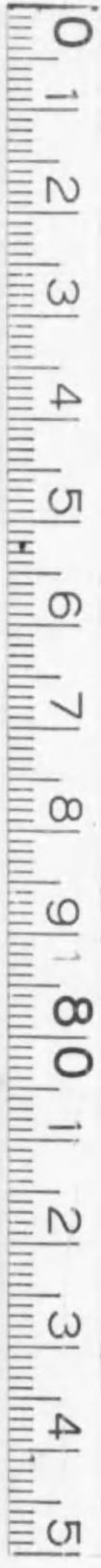
鶴來谷遊記

特 257

24

555

00



始



特257
555



鶴來谷遊記

附鶴來遺文抄



凡例

- 一本書ハ我ガ郷土ノ名勝、史蹟、物産、人物等ヲ汎ク世ニ紹介シ、且ハ郷土人ヲシテ愛郷ノ精神ヲ鼓吹センタメニ、編纂セルモノナリ。
- 一「鶴來谷遊記」ハ、其卷首ニ誌サレタル如ク、モト編者ガ骨書セシヲ、稼堂先生皮ヲハリ肉ヲツケ、以テ生氣ヲ添ヘラレタルモノニシテ、俗ニ鶴來以與ヲ鶴來谷ト總稱スルガ故ニ、カク題セシモノナリ。
- 一附録ノ「鶴來遺文抄」ハ、編者ガコ、十數年來、郷土史料涉獵中、偶管見ニ觸レシ者ヨリ成レル「鶴來遺文聚」ノ中ヨリ、成ルヘク題詠ノ重複ヲ避ケテ選擇收拾セシナリ。
- 一附録中白山ニ關スルモノ、及ビ近刊ノ諸書ニ掲ゲラレタルモノハ、俳諧ヲ除ク外ハ總テ省略セリ。
- 一這般稼堂先生ノ御來杖ヲ記念トシテ、數多ノ揮毫ヲ贈ラレ、且ツ本書出版ノ援助ヲ賜ハル、因テ茲ニ深ク鳴謝ノ意ヲ表ス。

昭和丙子文月下浣

編者 謙

鶴來谷遊記

物ニハ骨アリ、肉アリ、肉アリテ骨ナケレバ、蠅虫ナリ、骨アリテ肉ナケレバ、骸骨ナリ、古ノ文ニハ骸骨多ク、今ノ文ニハ蠅虫多シ、余鶴來保勝會ノ招ニヨリ、竹軒老人ト同行ニテ、ソノ地ニ遊ブ、長基梅溪、武閑雲ノ二子迎ヘテ、諸所ニ案内セラル、旬日ヲヘテ、閑雲子來テ、當日ノ遊記ヲ骨書シテ、之ニ肉ヲツケテヨト云フ、余ヨツテ皮ヲハリ、肉ヲツク、サレバ余ハ豊肉ヲ好マズ、瘦肉ヲ付シ、一篇ノ遊記トス、時ハ今茲ノ霜月九日、昨夜ノ雨ハレテ、希有ノ晴トナル、乃チ白菊町驛ヨリ、鶴來行ノ電車ニノリ、野々市、四十万、日ノ御子ヲヘテ、鶴來ニ至ル、右ニハ天狗橋アリ、左ニハ一閑院アリ、手取ノ大江、滔々トソノ間ヲ劈テ流レ、

竹軒、氏家氏

天狗橋
一閑院
手取川

市在家
一六市

館、後編來
ト書ク

青山白水、秋ニナレバ、變ジテ山紫水明トナリ、風景絶佳、中古ハ市在家ト稱シ、平安朝ヲヘテ、次第ニ土地開ケ、一六ニハ草市アリ、白山往還ノ入口ナレバ、進ムニ隨テ、名所舊蹟多ク、學者文人モ、此地ヨリ多ク出デ、鐵工サヘ軒ヲ並ベ、古ヘハ白山七社ノ御蔭ニヨリテ、刀鍛冶モ住メリ、今コソ鶴來ト書ケル、實ハ劍ノ一字ヲ二字ニセンタメニ充テシ名ナリ、カ、ル所ナレバ、文人墨客ノ杖ヲ曳キ笈ヲ負テ遊ブ者、今ニ絶エズ、

商家傍水關仙區野萩山肴滿坦衢菊酒味芳壓灘酒
煎油豆美勝膏腴鐵工錚鏗誇犀利漁獵新鮮專晚厨
菓物炭薪無不產雲間誰料有斯都

既ニシテ神社前驛ニツキ、下車シテ白山比咩神社ニ詣ツ、竹軒翁

白山比咩神
社

作アリ、
老杉矗々聳霜天。翠色千年自鬱然。伏拜闕宮肅無語。
神威烜赫大江邊。

宮司阪本氏ト閑談スル程ニ、閑雲、梅溪ノ二子來會ス、乃チ辭シテ出ツ、本社ハ加賀一ノ宮ニシテ、古ヘ國司ノ赴任スルルキハ、國司神拜トテ、先ツ參拜ヲ遂ゲシハ、コノ社ナリ、此事先日縣知事ニ招カレテ、講話セシトキ申オケリ、境内ニ老杉多ク、參道ニ大櫻アリ、花期盛觀ヲ呈ス、右側ニ一條ノ飛瀑アリ、琵琶瀑ト云、飛泉活々鑿巉巖。碧樹蒼々白日銜。賽客仰空莫空過。
神州直道在神杉。

參道ノ南ニ傾ガリ地藏ト云フ石地藏立テリ、僧泰澄大師ノ自作ト

加賀一ノ宮

琵琶瀑

傾ガリ地藏

安久壽ノ杜

三ノ宮

七個用水

臥龍堤

鶴來十二勝

云、

目モ鼻モナキ像ナレドアリノトミユルゾ人ノ誠ナリケル
立カヘリテ、安久壽ノ杜ニ至ル、比咩神社ノ舊社地ニシテ、樹ノ
少ナキハ、伐リ倒シ、ナルベシ、現今ノ地ニ遷座アリシハ、文明
十二年、シカルニ老杉ノガウノシキハ、三ノ宮ノアリシ所ナレ
バナリトゾ、三ノ宮ハ、ソレヨリ一ノ宮ニ合祀セシモノト聞ク、
コノ杜ヨリ和佐谷村ニ通フ吊橋アリ、崖下ニ淵アリ、イハユル七
個用水ノ入口ナリ、コノ水七千餘町歩ニ及ブトゾ、臥龍堤ハ、長
サ五百十三間、昨年ノ洪水ニ、水難ヲ免レシハ、コノ堤ノ堅固ナ
ルニ由ルト云リ、又コノ堤、觀月ニ宜シト云、
此地八景アリ、キケバ安政年間、福田美楯來遊ノ折、鶴來十二勝

鶴來八景

景ヲ選ビシ由、シカルニイツシカ失セタルモノ、アルヲ惜ミテ、
保勝會ノ諸子、補ヒテ八景ヲ定メシトゾ、ソノ景イト珍ラシク覺
エケレバ、歌ヲ係ク、

後高峰朝霞

朝霞タツキノ音モホノカナリ後ノ峯ニ杣ヤスムラン

白山路櫻花

路ノベノ花ハヒトヘノ山サクヲ神ニニ心アランモノカハ

月惜山時鳥

入ル影ヲ惜シムノミカハ在明ノ月ヲシ山ニナク時鳥

天狗橋納涼

鼻タカクカケタル橋ノ夕涼ミ袖フキカヘス天ノ河風

臥龍堤月見

龍ブシノ堤ノ月見カゲフミテ星ノヤドリヲシタニミル哉

金劔祠紅葉

金劔モリノモミヂ葉織リイダス錦ノウヘニ夕日テリソフ

不動瀧氷柱

玉簾タルヒノ柱ウゴキナキ白根ガ雪ノシヅクタクキツセ

一閑院暮雪

名ニシオフ寺ノ夕ダグレキテミレバツモル雪サヘシヅ心シテ
コ、ヨリ自動車ニノリテ、吉野ノ秋色ヲミル、去ヌル九月三十日
ニ遊ビシトハ、ケシキカハリ、昔人ノイヘリシ、日月ノ幾何ゾ、
江山モ亦識ルベカラザルノ感ナキニアラズ、且ツ見オトシタル所

謡曲、歌占
ノ瀧

モアレバ、拾ウテユク、左方ノ小丘ヨリオツル瀑アリ、歌占ノタ
キト云フ、謡曲ニミエシ歌占ナリ、
タツカ弓イニシ昔ノ歌占ヲ瀑ニトバメテ今ニ引ケル
直海ノ簪トカ云ル坂ヲ上ル、

遙々隔水有山家。紅葉白雲粲若花。夷險元來同一節。
坂頭九折去驅車。

櫻草ノ花

麓ヲミレバ、一面タバコノ畑ニシテ、其莖ヲ聚メタルニ、芽出デ
、花サク、其色淡紅ヲ帶ブ、直海谷ノ橋ヲ渡リテ、福岡、江津、
吉岡ノ三村ヲ過ギ、山手ヲミレバ、柿ノ實赤ク、累々トシテ垂ル、
コ、ハ柿子ノ産地ニシテ、正月ノ串柿ハ、多ク此ニ出ツト云フ、
人家ヲミレバ、已ニ皮ヲ剥ギテ軒ニ吊シケルヲミル、

串柿

煙草聚莖々着花。柿林留子々尤嘉。新年串柿仰供給。
世上縷煙亦耐賒。

此間ノ道、今ハ坦々タル車路トナリ、女子供マデモ、下駄バキニテ往交フナリ、オノレ明治十九年ニ、白山ノ三山ヲカケテ歸リシ時ノ苦シサヲ思合セバ、眞ニ是雲泥ノ差ナリ、之ヲ泰澄大師ノ時ニ比ベナバ、亦是天堂地獄ノ違アルベシ、然ルニコノ昭和ノ時代ニ出デ、明治ノ時ヲ知ラズ、明治ノ時ヲシリテ、崔村先生ノ時ヲシラズ、サレバ中古上古ヲ知ル筈ナク、坦途ヲ行テ、尙ホ苦情ヲ鳴ラス、物体ナキヲナリ、夫故ニ歴史ハアクマデモヨムベキナリ、歴史ヲヨメバ、コノ苦情ハ、一時ニヤムナリ、サルニテモ、人間氣魄ノ剛柔、脚力ノ強弱、是ニテモ察スベク、アマリ山岳ヲ

征服スルナドノ口業クワゲツヲツクルヲナカレ、スベテ大言壯語ハ、ミナ西洋人ノ口眞似ニテ、コノマネノ中ヨリ、六根清淨ノ謹慎ハ、失セユク者ニテ、天罰眼ノ前ニアリ、古ヘヨリカ、ル者ニ、身ヲ立テ業ヲ遂グル者ハ、曾テナキモノナリ、

憶昔草鞋破難關。而今遊杖踏屏顔。莫言我上白山頂。

一路輕車載上山。

細越トイフヲコユレバ、大鼓野ニ出ツ、俗ニドンド路ト云フ、踏メバ聲ヲナス、

人馬往還不絕蹤。惟聞脚下響鞦韆。地中大鼓休穿鑿。
凡智由來徒一重。

右折シテ高門橋ニツク、吉野十勝ノ一ナリ、前遊ノ日ニ得タル詩

ヲ、茲ニ挿ム、

靈杉歌 大智禪師所手植

倒植靈杉六百年。翠色參天鬱團欒。屈蟠四匝蓋十畝。
四時含風雨聲寒。智公來此卜幽隱。搬柴運水胷宇寬。
太守捐館千果熟。石頭高枕一睡安。禪餘別有公事在。
名分大義洒鐵肝。去扶武臣持苦節。歿分遺骨埋江干。
莫惟此土留高躅。芳塋河內緣不單。別掄十景供行客。
今日尋來倚杖看。君不見。方袍圓頂借僧體。滿腔義氣
方外冠。

吉野

自古芳山王氣鍾。此間更印智公蹤。須知南北有幽契。

仰見飛來千萬峯。

雲龍山

石峯戴樹杳難攀。雲裡蒼龍下負山。請爾不窺高僧境。
誰容一句着斯間。

九十九溪

九十九溪山雨中。飛流相競逐雄風。何人對此不驚歎。
百派銀河落自空。

飛龍巖

蛟竜下飲呂公磯。噴白江奔紫電飛。人巧天工双美並。
往來滿腹浩然歸。

虎狼岩

虎狼崑上茂林遮。首尾沒處纔露牙。可畏陽春好時節。
猛然走出趁狂花。

高門橋

兩崖矗立万巖屏。汨々奔流似建瓴。高架虹梁美如畫。
行人穿去一林青。

吉野村
味智神社址

既ニシテ吉野村ニ近ツケバ、左ニオボク杉、右ニ味智神社ノ址アリ、昔此社ニハ道公ノ祖神ヲ祀リ、ソノ郷ヲ味智ト名ツク、按ニ廷喜式ニ、味智神社アリ、又加賀郡ノ少領ニ道公勝名アリ、道公ハ、大彦命彦屋主男心命ノ後ニシテ、道公ノ姓ヲ賜ハリ、其人ノ郎媛召サレテ宮中ニ入り、天智帝ノ皇子施基皇子ヲ生ム、カ、ル家筋ナレバ、其神社ハ足利氏ノ末マデモアリツラン、郷名モ豊臣

道公

味智郷

太閤ノ制札ニ味智郷七村トアレバ、河内郷ヨリ奥ヲ美智郷ト稱シテ、七村ヲ管セシ者ナリ、然ルニ其後佐久間氏ナドノ兵火ニカ、リ、遂ニ神社ハ跡方モナクナリ、郷名モ消エ失セヌ、近頃東京ナル金澤出身ノ有志間ニ、神社復舊ノ議アリトキク、ゲニモステオキガタキ事ドモナリ、

元是皇胤絶人羣。忽上天闈幸聖君。祠廢跡荒覓無處。
行人漫踏隴頭雲。

不老峽

不老峽ニ至テ瓢ヲ傾キ、各詩アリ、

霜染溪林樹々鮮。淺深如錦共妍々。崑頭打坐傾瓢酒。
我輩風流在此邊。

竹軒

喚友再遊山下村。乾黃爛紫映匏樽。千尋絕壁楓林裡。

祇陀寺址

オボク杉

加賀菊酒

舟岡山

對酌三杯不老魂。

稼堂

歸途獅子山祇陀寺ノ址、下吉野ヨリ山ニ入ル七八丁ニアリトイヘド、時ノ都合ニヨツテ、後日ニユヅリヌ、オボク杉ハ、オプクノ訛ニテ、御佛供ナリ、智公ノ塔ニ香花ヲ供フル所ニアレバナリ、鶴來ニ至リ、和田屋ニ請ゼラレテ、午餼ノ馳走ヲ享ク、手取ノ魚ニ菊水ノ酒、ハカラス酩酊ニ及ブ、殊ニ白水少將ノ額ヲ掲ゲタル、至テ見事ナルニ、更ニ興ヲマス、サテソノカタハラノ額ヲミテ、興ヲサマシヌ、主人ハ軍人ニテ、料理亭ヲ營ムト云、

手取江魚菊水酒。滿園紅葉白雲杯。楯間名筆更添興。何物漫書汗眼來。

舟岡山ニ登リテ、小川靖齋夫婦ノ墓ヲ弔フ、

贈正五位小川幸三直子

金子鶴那

一爲貞婦一忠臣。更看其子並墳新。秋風聲裡掃苔石。

兩度來爲墮淚人。

稼堂

舟岡山上一丘墳。荒樹蒼蒼夕日曛。屹立酒來懷古淚。

天恩早已及遺勳。

竹軒

其子忠明ハ、余ニ學ビシ者、福岡縣ニ移リ住シ、昨年病死シ、同ジク此ニ遺骨ヲ埋ム、コノ北ニ金子雀邨翁ノ墓アリ、其子成、雋兄弟ノ建テシナリト云、爾來九十四年、墓傾キ苔蒸シテ、見ル影モナシ、因テ近頃保勝會ニテ移座ノ議アリト聞ク、

當年我記先生傳。今日來尋先生墳。千古所傳皆教訓。

更開萬疊白山雲。

故丘埋骨不埋名。史上功勳千古聲。男子所期元在此。

贈從五位
左衛門
井次郎左衛門

贈從五位大
城戸長兵衛

慨然掃石弔先生。
轉ジテ碓井梅嶺ノ墓ヲ弔フ、

護國齊家有孝孫。一坏之土繚崇垣。忠臣名號非記號。
曰古曰梅義氣存。

同所ニ大城戸宗守ノ墓モアリツルニ、見オトシタレバ、後日ニセ
リ、宗守ノ子ヲ宗重ト云フ、大阪ニ出デ、藤澤南岳ノ泊園書院ニ
學ブ、南岳ハ東咳先生ノ嗣ニシテ、先生ハ先師容齋翁ノ師ナリ、
是ニヨツテ、宗重モ翁ノ宅ヘ師命ヲ奉ジテ來リシヲアリ、余モソ
ノ縁ニヨリテ、大阪ニ出デ、同書院ニ遊ブ、其ノ頃宗重ハ塾長
タリ、去テ東京ニ出シ片、余ソノ後ヲ繼ゲリ、又余ノ東京ニ出シ
片モ、余ガタメニ師ヲ選デクレタリ、シカルニ宗重ノ畫ヲヨクス

ルヲシラズ、後ニソノ畫ヲミテ驚キタルナリ、是レ加賀藩士ノ
風ナリ、

物有因縁々若絲。三千歴史總如斯。不知知己沒何處。
異日墓前述所思。

小學校ニ至テ、新設靖齋君ノ銅像ヲミル、君ノ母ニシテ知ルヲア
ラバ、笠キセマシテ、衣キセマシテ言ハンカ、願ハクハ爲メニ
屋ヲ構ヘラレタシ、是ハ愚老ノ望ナリ、像ノ後方ニ松梅柳ノ古木
アリ、村山翠屋ノ住居ナリシトゾ、本願寺ノ別院ニ入りテ、後園
ヲ一覽ス、上内山ノ水オチテ、小瀑布ヲ成シ、鳥鳴イテ山更ニ幽
ナリノ趣アリ、

金劔祠ノ參道ニ向ヘバ、不動瀑アリ、八景ノ一ナリ、左側ニ靖齋

村山翠屋

不動瀑

小川幸三故
宅碑

故宅ノ碑アリ、靖齋君コ、ニ生レシナリ、吾嘗テ詩ヲ賦シ、忠明
子ニ贈リシコアリ、其詩、

窮陬山水美。玆毓麒麟兒。豈翹風雲會。忠孝撐頹臆。古
聞老栢詠。今見舊廬碑。屋烏人猶愛。况於宅址遺。儼乎
一片石。萬古其無虧。吾聞感不已。俯仰裁微辭。

金銀神社

祠ヲ拜ス、天孫ヲ祀ル、白山七社ノ一ニシテ、往古木曾將軍義仲
祈願ノコト、史ニミエタリ、尋テ義經モ詣テ、神樂ヲ奏セシトナリ、

義經腰掛石

義經ノ腰掛石ト云アリ、ソコヨリ北海ヲミル、風景イト佳シ、ソ
ノ手前ニ天ノ眞名井ト云アリテ、終古涸レズ、眞名井ハ丹後ニモ
アリ、コノ井ニテ神饌ヲ洗淨メシ者ナリ、繪馬堂ニ萬葉ガキノ歌
ヲ奉納セルアリ、ソノ中ニ五十嵐篤好、田中躬之ナドノ名ミユ、

天ノ眞名井

筆者ハ高木有能ナリ、

天壇高處北溟遙。千樹楓杉總耐描。最愛祠前柵中石。
堅貞長印武臣腰。

楚常句碑

前田氏直行

礎ヲ下レバ楚常ノ句碑アリ、其左手ニ立ツ標石ヲミル、前田男爵
ノ筆ニシテ、中納言卿ニ似タリ、首俯シテ地ニ至ル、ソノ前ヲス
ギテ、梅溪ノ宅ニタチヨリ、鶴邨先生ノ神農畫像、梅嶺君ノ遺墨
ナドヲミル、ソノ中ニ志士文人ノ書翰ナド數多シ、梅溪ハ梅嶺君
ノ裔ナリ、當所ノ名門ナリ、酒屋ヲ營ミ、米屋ト稱シ、今ニ屋號
トス、梅溪、藥店ヲ業トシ、姓ハ故アリテ長基ト改ム、夕飯ノ享
ヲ受ケ、酒間雅談ニ打興ズルホドニ、目名安居、水野華月ナドノ
風友來會、歸ルニ臨テ、銘酒萬歲樂ヲ一瓶ツ、携ヘ贈ラレ、送り

テ中鶴來驛ニ至テ袖ヲ分ツ、コノ酒ハ最モ口ニ適ヒ、前記ノ詩ハ、
ミナコノ釀泉ヨリ湧出シナリ、

白嶽峯前菊水流。汲來釀酒幾千秋。一樽見贈詞源湧。
一斗百篇大白浮。

昭和十年歲在乙亥臘月十四日、風雪撲窓。凍手如龜。

七十八翁 稼堂老人

鶴來谷遊記終

附錄 鶴來遺文抄

加州石川郡劍村金劍宮常燈記

傳記曰。金劍明神者。本地俱梨伽羅不動也。白山權現第一
王子。弘仁十四年。立此宮。今既逮八百八十餘年。中間物換
星移。舊址興替不稽。雖然。祭祀如在。靈應益著矣。嗚呼。白嶺
神者。日域男女之元神也。於其長子。誰有不欽敬哉。疑巍德
行。昭昭功化。奚同閉神野鬼之隊。茲村閭同志者。俱勦力捧
一蓋常燈。壇上長時紅影。燦爛輝於春花秋葉之上。不夜光
彩。玲瓏涌於朝陽夕照之外。實是階前奇觀。不盡神物。其功
可謂偉也。昔阿闍世王具百斛麻油。多然燈以供養佛時。一
貧母見之感激。乞得兩錢買膏油。欲然一燈作後世本。即往

萬壽寺、河北
傳燈寺住

佛所然之。至明曉。王所然燈或盡。母所然燈光特朗也。目連盡威神力。引隨嵐風吹之。猶盛上照梵天。傍照三千界。蓋此至誠無限福報。不窮古今必矣。所期丙丁。常挑本地。風光朱明。遠數和光瑞彩。俱破蒙昧心。同入光明藏。鄉入謀遺烈垂於永久。令余記神燈之來端。因賦偈慶讚。

伊奘諾子。大聖應身。金劍赫々。仰稱明神。

一燈朝夜。影接兩輪。內外淨極。光通刹塵。

凶星退散。吉曜來臻。瑞輝靈照。永利萬民。

時元祿十七龍集甲申正月穀旦

傳燈沙門峯萬喬謹誌

○

莊岳、字
子健、金澤
人、其居
イフ山、水堂ト

風雅一首序

乾 莊 岳

犀浦之源。出于長白山。遠城南郭外。流派遠矣。資川同源。遠鶴邑。支流分矣。二川溶溶。雖旱歲不竭。田畝皆資灌溉。幾許其下流竝入海。二川離於民。而有益於國家莫大焉。或長白山絕頂澗谷之間。有菊叢。其滴瀝濫觴於二川。故釀下流爲酒。芳香清冽。勝於他邦。鶴邑民多業之。家家名其酒。或曰朝日菊。重菊。白菊。醕則盃中餘痕。滴滴作菊花樣。是其一奇事也。昔時有阿菊孃者。不知何世人。蓋謂當時酒肆當壚女也。其滌盃者。又焉知非四壁之徒耶。凌雲未成歟。狗監未逢歟。其家其族。世無知者。我北方人傑地靈。至操觚之徒。振古不乏其人。雖然。其文章不少。概見何哉。嗚呼。彼花滿蹊。黃四娘

朝來酒ニ、
朝日菊、重
菊、白菊ノ
名見ユ

加賀阿菊

鶴邨、諱ハ、有斐、一人、ノ、天、金、澤、保、來、ノ、命、二十一年、山ニ葬ル

何人。余因加賀阿菊孃深有感。

鶴來村雜咏

金子鶴邨

村路雪封行賈疎。三旬餘日市無魚。偶烹新兔寒窓底。微醉臥看小說書。

春日遊舟岡山。題紫芝園上人房。

僅啓翠蘿西牖前。平湖半幅截晴煙。悠悠綠野清輝足。令我更懷二頃田。雲房烹茗頰清閑。樹影漸移未道還。面上紅塵當洗去。翠藍滴面舟岡山。

與諸子再遊一閑院

提携同社出塵寰。復訪遠公叩竹關。池淨白雲生苔石。林寂篔簹流迴樹間。人肆五百鶴來里。隔水十里能美山。歸路黃昏啓轎見。水田印影月如彎。

宿吉野村

山翁性朴枝心微。迎客夜堂火坑圍。兒女更闌猶未寢。多燃木葉補寒衣。

早發中宮村至清濁橋

行々石壁列雲屏。翠柏丹楓朝旭熒。十里逆流都白沫。濁清橋下始看青。

祇陀寺屏風。木村罪湖描吉野十景。

題虎狼山圖。

巖栖道士鍊丹成。雲帔星冠朝上清。守鼎虎狼飛去後。青山永駐二神名。

○ 訪鶴村陽壽院閑居。

關山

曉出金城遙訪幽。午陰到此旅情休。佳名千歲鶴來酒。壽擬南陽慕道流。

○ 此處美酒有名。因句中及茲

守部杏邨

鶴來村裏酒如川。四八成羣市廛連。十里歸程消白日。五方商賈數青錢。溪流秋釀杯浮菊。玉漱春香客學仙。人世風波

杏邨、名義、字ハ方叔、鶴來ノ人、天保四年歿、明治十六年、

看更急。好求醉石伴孤眼。

ニ改ム

○ 歌占瀑布

夏陰鬱々白山邨。吟杖乘間到野原。田面秧搖波浩渺。懸河霧散玉潺湲。春園花馥一夏蝶。秋聲醒驚兩地魂。東岳西巒相屹立。水風蕭寂對黃昏。

○ 清澤懷古

稻淵

山隱雨歇草如烟。吊古荒園清澤邊。新樹似知當日恨。枝々露滴晚風前。

○ 夏日遊金劍祠

櫻井蓼齋

清澤願得寺址、上内山ニアリ

蕪齊、鶴來

ノ人、昔川
洪園門、皆
年不詳

一掬巖間水。清淋失暑權。寒蟬偏遠社。夏木鬱參天。與鳥隔
林話。迎風曲肱眠。裝幽松樹月。久戀綠苔邊。

羽人壁

傳道壁山棲羽客。鬼工削作峙人頭。松身蘿挂黃丹雜。巖脚
魚充碧水流。月夜峒窠蘆笛響。朝暉水面赤城浮。人間瞻望
香蕈節。早晚雲歸鎖暮秋。

春日步舟岡城墟

蹊路香風人面暄。家々紙鳶帶箏翻。數行雁字隔雲映。一詠
芹田成潦渾。澗戶懸糸歌占瀑。李花釀雪白山村。城頭幾度
送春去。草石縱橫着屐痕。

和佐谷渡口

雁行堰埭遮長水。竹箔梳流湧衆漚。護村防決新壅堤。映波
摧影古城丘。金剛嵌石熾丹火。菩薩枕山鎮碧流。一帶長繩
繫野艇。載柴積炭自由浮。

遊白根川

香魚打盡石將頑。老幼逍遙三伏間。早晚涼多川一帶。暑威
殊緩兩方山。

遊廣瀨渡口

長繩亘水小舟浮。來去總攀延不休。廣瀨村門三兩戶。屋山
隔竹寫川流。

直海村茶店

茅軒相双倚踈竹。店面大巖高乎屋。檐底千仞橫板橋。梭鞋

盤嶺三子金蟬
久次年日
盤嶺三子金蟬
三子金蟬
城三子金蟬
村山南
池村山南
爲三山
名保三
天夏四
旬登臨
中未

欲度一身縮。

衡門橋

橋下淵幽大川中。波心到處酒樽空。却嗤興後人難醉。只見兩岸楓樹紅。

遊池三峰山八絕

金子盤嶺

橐籥相約酷慙慙。嶺雪漸斑夏氣薰。不獨劉安從家眷。又携雞犬入層雲。
荒村透膚晚寒生。槽拙烟暄夢也清。一夜潺湲澗泉咽。驚醒風雨枕邊聲。
不受風塵涉世汙。三峰峰下羽人居。客遊先爲桃源客。興亡

何知秦有無。

聳峰疊巘迴簷楣。吹落翠嵐雲影移。要識溪山秀媚面。請看士女有丰姿。

野菜山肴甜媚舌。境清人骨景清詩。如非杖屨仙山到。泉石膏肓爭得醫。

洞門削玉界仙鄉。千尺穹窿架屋梁。不是鬼工即神設。谿山六月見寒光。

溪東盤渦鳴不平。崎嶇棧道渡崢嶸。懸崖絕壁盪胸立。幾簇紅雲炙眼明。

踏破層雲步虛聲。千峰萬壑落雙眸。只知羽翼騰身去。且駕長風訪十洲。

健造、名ハ
三ノ産、明治來
澤ニ投ス

手取川上有感

瀨尾 劍 北

白峯纔隔水如弓。石牒堤防西又東。時務向誰論利害。禹廟
回首冷秋風。

不動瀑布

金子 守 株

長井葵園君、久しく不動瀧 石川郡直海溪板尾村山中にあり我郷より行程三里余 遊覽の志ありと
いへども、出勤の暇なくして光陰を送り給ふ。今茲十月上旬 天保二年
卯一日の閑を得て、雀邨老父にいざなはれ、余が弊廬に入給ふ、
喜び迎へて、飯を炊き素菜を烹て、いさゝか村酒の薄きをすすめ、
往事の清遊を思ひ出て語りつゝ、今も亦、扇子に途中の吟をしる

葵園、字ハ
寛和、金澤
ノ人、安政
七年歿ス

し給ふ。其詩に曰

茅店過來少問程。一閑院裏午鐘鳴。
遊人不管景光短。故向霜紅深處行。

此夜初更の比より、余が友さち五六輩訪來て、清談時を移し夜闌に
及ぶ。暫く繩床の夢を結び、曙天の霜を拂ひ、白根の流にそひて、
山逕のけはしきを走る。文園東耕の二子、二老が行程をたすけん
が爲に、こく起出て家童に酒を荷はせ、晝の催しなど携へ來て行
くに、霜風面を撃て利きこ骨をさす、連山寒霧かゝつて手足凍
え氣ちぢまる。幸に茶店を得てやすらひ、一瓢の酒に風寒をほご
き、山深く分入るに、満山の霜葉錦を織り、一帶の急流藍をたゞ
ふるに似たり。此風光雅君の爲に、秋を止めしやと覺ゆる斗なり。

山頂日登て霧晴れ、雲散じて暄をおぼゆ、歩々板尾村に到る。瀑布を尋て東にすくめば、忽樵夫の溪橋を過るを見る、袂をひかへて、瀑布の路教へてんやといふに、心やすげに人々を伴ひ、瀧の下にてわかる。こゝよりたどり行くに、地勢甚峻にして、杖にすがり手に手をとりにて、よち登ること五六曲、岩頭を巡り石逕を過て、望めば瀑布半天より落ち水勢雲を切てなぐるにひとしく、水は瀧のなかばにあたりて、微塵に碎け、飛ぶこと雨の如く霧のごとし、岩壁濛々たる其中に、又數絲の小瀧を看る、時あつて不動尊の形を現し給ふが故に不動が瀧と稱するよし、山人の語りし。千丈の瀧の下、水聲響き、百尺の奇巖、紅葉に映りてまばゆし。眼を定めて觀れば、瞳是が爲に暈り、耳をかたむくれば、耳是が

爲に聾に似たり。一條の山逕、水源に通ず、試に登りて、彼の絶頂にいたらんとすれば、足うかみ身体ふるうて、魄天外に飛ぶ。すくむにおそく、退くにはやく、此時あふぎ見れば、日己に天心にあり、人々空腹のさざしあれば、石逕を下り飛泉の流に添ひ、屏風に座して晝のかれいを解き、茶を煎じ酒を温て、風景にさまよひ、詩を裁し、發句などものして、初冬の影の短きを惜む。

崔邨老父が詩に曰

久聞板尾有瀑布。尋討易違歲月遷。吾友長君好事士。聞勝心不堪垂涎。同遊相謀定發輒。偶得晴色三日堅。芒鞋短笠掃曉色。双袖風生氣翩々。行到鶴來予桑梓。一堵舊廬猶依然。鶴來諸子本舊社。兒孫亦喜爲執鞭。明日提挈入山路。山

光溪流眞可憐。金碧嶺畫將軍法。渲淡樹得摩詰玄。唵眸馳
處絕塵氣。各傾瓢酒息山塵。自此前程途危嶮。千林駐秋光
娟々。一壑幽賞未畢去。一丘壯觀來迎鮮。身嘆買臣歸鄉富。
脚疑渡濯錦蜀川。瀑布漸近道嶮峻。一枝藜筇已失便。手執
石稜匍匐上。胸悸脚麻汗流肩。攀躋極力莫餘勇。前導報言
已至巔。氣蘇開眼見大谷。大谷西北山蟬聯。石壁削成光如
墨。中有龍綃千尺懸。天女剪雲拋谷底。風伯吹雨散四邊。殷
々春雷滿兩耳。水氣隔谷冷如澗。兩畔作林老樹密。纈纈十
色染嵐烟。天然錦障如護景。往來白雲似載仙。正知山靈秘
情景。不許塵俗漫相傳。荒涼深谷人跡絕。一味蕭洒刈羊羶。
徘徊只恨冬景促。老矣再遊期何年。勉強割愛下石逕。歸路

雖嶮易於前。飯來燈前欲記景。神境奪魂難成篇。即今倩誰
寫勝絕。千歲空想李青蓮。

此日、中嶋村岩ヶ端といへる所を過るごて、東耕のぬし時雨
の句をものせしに、さすがに風流の捨がたければ、兩三句付
け送りて途中のたすけとす。

松杉の外を時雨の山めぐり 東 耕

雲を洩る日に乾く茶の花 守 株

世の垢を洗ふ小家の水くみて 文 園

別れては又歸るかし鳥 耕 株

秋さいふ朝から四方の澄み渡り 株 園

一葉おつれば月近くなる 園 株

そここの踊に風をひかさじと

君が寢覺にうつくしき眉

くり返す糸のもつれも戀のはし

猶降りかたい鐘の鳴りよう

大方は小魚ばかりを賣仕舞

鳥井の半沈むみち汐

耕 株 園 耕 株 園

敷島の道に疎ければ、てにをはいやくつくりたるにも恥ず、
瀧の白糸紅葉にうちかこりていと風景のまされるにめてく、

龍田姫瀧の白糸とりあへず紅葉の綿織あげにけり

なごみ吟じて、暮かゝる比家に歸りぬ。

○

來同山に遊ぶ

金子守株

天保三年壬辰九月下旬廿六日、文園淇泉の二子、雀邨老父等、小童
二三輩を擁して來同山に遊ぶ。此日東南の風暖を催し、しかも春
に似たり、望むに西山數峯畦の如く、幾萬重連り、紅葉錦を敷く
に勝れり、ふもとの白根川澄きり、千筋にながれて、元浦湊の濱
に通し、蒼海一文字に晴渡り、漁帆數点の陰あり、西南を望めは
小松の城黒々と見え、今井の三江、水光りて銀を流すかとうたが
ふ、三國の浦、離か嶽一望の中にあり、唯半日の賞遊數月の憂を
破り、美酒あり、佳肴あり、只勝景詩情をうはうて、暫く口を閉
づ、暮天一閑院に入て茶を乞に、秋の日の定めなくして、俄か雨
を催しければ、人々家に歸るに、半途雨に逢ふ。

大八洲重浪不立安國斗平治御世乃邑名登負氣無
 今乃假字母改利鶴來乃里本與初生須奈神斗
 仰祭留金劍宮登白須者七社刀伊都伎賜會禮賀一
 處奈母有言卷毛加斯古伎伊都伎賜會禮賀一
 天御孫尊仁在三種乃神多可良天津日嗣土受嗣麻
 志阿米之八重雲雲伊頭千別天村雲能御劍
 之美稜威將豐葦原荒振蒼生乎中津久邇乃真民艸斗
 摩賜草薙乃恩賴毛同白山並立是高山之末天地
 之牟多遠長久鎮利在太前蛇之池御名者負氏勢天
 忍水賀本津號平天村雲命乃深支美伊佐袁計奈事之
 平奈流天村雲命乃深支美伊佐袁計奈事之

謂以禮牛石士美名者負氏勢天忍石賀本津號賀磯城瑞
 籬宮大御世是乃幸氣事之謂以禮今日御社仁參詣氏於呂加
 靈乃曾波利在幸氣事之謂以禮今日御社仁參詣氏於呂加
 美侍耳社主之鳥膩十六自物以波比出而山管之根毛己
 呂爾爾白玉椿都婆良誤仁語繼賀留麻豆多輔妬可里氣理阿那
 可斯古可利計留
 高知豆一村立流銓杉者楸觸峯歟美都留伎廼宮
 八束穗乃千五百之秋乎禱爾毛是能美山曾高千穗神
 匏形能天乃真名井廼水分耳八雲之幸袁不仰在良米也
 此也是能天降志神乃高座常盤堅盤能天津靈仁

八醞乃劍之里廼三輪居且禍者阿良自刀惠良久神賀

荒井都良名

宮柱太敷立而食國土瑞穗乃邦爾天降麻志劍

石黒信正

神許許呂常盤堅盤廼美鏡斗天之眞名井邇影止牟良武

山田毅

天津瓊梓爰毛奇日乃高千穗刀敷多多志座白山麓

山崎政弘

玉手次懸氏欲仰天津神國津御神廼中津美柱

森眞民

十握持且鎮麻志氣牟高千穗乃光乎此耳御劍廼里

久方乃天八重雲乎押別且初國所知神曾此神

加藤幸世

白山廼劍乃神耳年越經且只加久志管戀屋和多羅牟

河合宗明

天孫者佐奈可良爾座伊可斯御世蒼生毛神加良爾志而

宮方夏麻信

靈治波布神廼隨意母民艸者千別師雲之櫻挿氏

高木有信

天降座神代廼往昔言繼跡劍廼宮者鎮麻志氣牟

境春兄

田中躬之

利劍也劍之宮廻御垣邊爾鋪計留小石毛奇備而在鴨
五十嵐篤好
治禮流都留伎者神廻美心土禰宜言掛津可斯古計禮登
母

白雪能經西加微廻幸靈仰麻都連與天益人許等其等

高桑雅尙
福島八尋

押雲乃雲能米具美廻雨露乎宇氣氏潤留四方之民草

小野居一

通武賀利乃神廻疾波能手取川深謂以乎久免也里回裳

福島基翠

御雪零磐根巨巨敷白山毛道別師神廻大宮柱

熊澤白根

天地之分志時乃神寶三種乎爰耳仰可斯古佐

宇田久雄

比佐加太廻從空於都留眞沼井爾寫且仰美劍乃宮

龜川直根

世世經師天真井廻水澄而深謂以波加美曾知蘭

清川御春

天乙女神袁奈吳武留袖那良牟此穗觸乃峯廻紅葉母

和田惟親

蔭高久劍之宮居神佐備且伊夜千萬世比可理益良牟

守株、鶴安
ニ投ス

敷島乃大和島根之宮柱陶 美榮 韓國左右手毛仰御世可裳

龜川氏文子

禰宜麻都流身仁者神籬磐境乃多多斯御事爾阿兄牟可志己左

高木有能

天保三年

○

辰口村温泉

金子守株

天保五甲午春止月半の頃より村人集て温泉を掘る此温泉古より數度掘 口なくして幾年是を見物せんと、近郷の人々日々群集、糸を引くがこ かし。然に三月七日の頃、予も爰に遊ばんが爲に、近隣の少年を

伴ひ、白根の流を渡り、和佐谷越にかゝれば、此日天清く日影朗にして、東風暖を送り、菜花争開て春色畫がごとし。大口峠を登るに、爰の溪間、かしこの峰に、山櫻咲みだれて、人々の目をよろこばしむる、心なく一枝手折んとすれば、荆棘に引れ、あるは岩はしにつまづくなどものうければ、心なき路の曲りや山櫻、といひ捨て峠を過ぎ、大口村にいたる。村の端より西に向て山を巡り三四曲、高きに登れば坪野峠ごかや。碧松枝を連れ、綠陰心魂を清む、西北の蒼海、天を浸し、多小の白帆、風に隨て眼前にあり、石立の浦は浦嶋の名残を惜み、元浦の平砂白波にゆられ、湊の津頭は白根の流を吸ふが如し、安宅の松原は黒くして古跡を留む、小潮橋立の藻塩焚く烟は、歌人の意を傷ましむべし。此風景

に座してわりごをほごき、晝の餓ゑをたすく、是より坪野、金剛寺、和氣村に到て路を尋ね、北を望て細き山路を登り、そこはかごなく、しらぬ山中をたごり行くに、去年の落葉にうちまぢりて、堇、蒲公英の咲けるもやさしくまた哀也、春の光の私なればこそと、松が根に腰うちかけて、遠近のたつきもしらぬ山中にと、讀し古歌の情にむせぶ、漸あつて何所なもしらず、足にまかせて逕を走るに、百歩ばかりにして、はからず松葉搔く兒にいざなはれ、路を求めて火釜村に出る、始て酔の醒たる心地して、喜しくも人家に茶を乞などして、來丸村を過ぎ山を巡りて、温泉に到り見れば、此日は休日とて、温泉を掘る人もなく物靜なりけり、湯壺は廻り二三間ばかり掘ぬき、半は水にして底は見えず、村人に

問へば、三間斗掘けるに地底、岩石にして掘難しと聞えき、岩をうちくだきし物、處々に積上たり、中々湯口は知難かるべしと思ひぬ。あたりにあさまなる茶屋懸連ね、酒肴など賣る賤の女ありけり、立入りて茶を乞ふ、菓子など取はやしけるに、永き日影も申の刻に近ければ、少年の歸る事を求む、されば道をかへて岩内村に出るに、南の方山に添うて長瀧村あり、此村の山中に久しく瀧有りといふ事を聞く、いざ行て看んと、長瀧村瀧を以村名とする歟に到り、路を尋て、流にさかのぼり、山へ入るこど二三丁ばかりにして、望めば瀧あり、徑青山の半に通ず、登るに嶮峻なり、藤かつらに取り付き、木の根、岩がねを踏て瀧の下に到り、杖を駐て点檢すれば、水源山上にあつて瀧水落るを、二三丈もあらんぞ見え

つ、立岩色黒くして其形奇也、皆四角に切れたる物にひとし、水は岩間を落て瀧壺に入り、流るゝに亦壺あり、かく流るゝに瀧壺七つありて、水灘を落る龍門の八節灘もかくなるものか故に七瀧といふか、亦瀧の長きを以て長瀧といふか、問べき人もなければ其事をやめぬ。此瀧満水の時は奇なるへく、己に夕陽影沈んで風景陰々たり、峯の松風肅然たり、蚊蝮のやうなる小虫雲の如く起る、此小虫晩景に群をなせるか、常盤木の枝を手折てうち拂ひ、辛うじて戻りぬ。

芝蘭室記

碓井梅嶺

○
叢篁瓦礫の地を闢まで、一室をいとなむものは、辻氏某なり。このぬし、神を六合の外にやしなひ、情を方丈のうちにもとめむと、

辻氏、字徳
龍來ノ
人、嘉永五
年歿ス

趣高く意ひろく、造りなせる物好膝を容るゝの間、しかもたくみにしつらへる飾りもなく、王氏が急雨密雪のために、竹もてつくれる物にも慣はず、たゞ松栢椎柴もてあやなせるは、かの上古椽楹けつらす、茅茨きらすの神世の風俗をまなびたれご、おのづから春は飛花にむかひて、無常迅速の世上を觀し、秋は斜月にのぞみて、造化輪廻の不易を愛す、されば鼓琴詠詩の興は、いふもさら也、四時の風姿かずく也。先この境の地勢たるや、翠微をのほるここ數百歩にして、うしろに劔の宮たゞせ給ふ。抑このおほん神は、養老のころ草創ありしより、連綿たる和光の燈影一邨にかがやき、清冽たる眞井の靈泉萬民をうるほし、代々に神さび、跡をたれたまふ、威徳いとたのもし。爰の社頭につゞきて巽の方

に城跡あり、舟岡山となづく、往昔高畠何某がこもれる遺趾にし
て、百歳のむかし、いかなる秋風にかきそはれけむ、いま名のみ
傳はれるぞ、更にあはれを催しける。そが一けたうへの山をば、
月をしみこ呼ぶなるは、こころなき峯だにも、百代の過客をし
むにや、この名あるもなつかし。又眼下に一帶の巨川は、おと高
き手取の急流、其みなもとは白根か嶽にいで、千蛇の池のなが
れ盡せず、一溪の菊花匂ひ、こゝに長く引て、委蛇として遠く元
浦に落つ。渺々たる波濤たちまち空にうつろひ、泛々たる漁帆夕
陽にたゞよふなど、手にごるがごと一望に入ぬ。さてまちかき梨
笠山の東風には、啼猿翠屏に吟し、ふもとの小田には鳴蛙早苗に
戯れ、さとの賤女がうつ礎のおとは、ぬば玉の夜をこめて、あや

に思ひ深く、雪のあした、閑窓にひびく山手の鐘まで、みなこゝ
らもてなせる風情なるへし。はたあるじのたくみなるか、動靜の
ふたつ、物として具せざるはなく、景として盡さざるはなし。こ
れぞ無何有の郷なるべき。されば室に名づくるに、たゞ芝蘭の二
字をかむらしむるもかなへりとして、筆を採る日は天保十一年仲
秋巳望。

ふりかへり月をみやまの床の前

○

詠鶴來十二勝景歌

福田美楯

後高峯縫霞

春きぬと思ひあかりて朝なくしりたか山にたつ霞哉

美楯、京都
ノ人、嘉永
三年歿ス

手取川流漸

ひむかしの風の手取の川水のぬるむまに／＼氷流るゝ

船岡廟櫻花

かぢさをのなき舟岡の山櫻花やむかしにこがれ咲らむ

月惜山杜鵑

ほこぎす名乗りしてけり月よりも山のあなたの人や惜みし

天狗壁薰風

はふきつゝたてけむ岩のかべなれやみなみの風は手にまかせつゝ

眞名井祈雨

久堅のあまのまなるに祈れはか神のいぶきの雨とふるへき

月橋邨擣衣

あきの夜の月更けわたる川橋のつめに手だゆく衣うつ也

臥龍堤玉蟾

雲る路にのほるへきまごふすたつの人めつゝみを月てらすみゆ

金劔祠紅葉

みつるきの光はかりて紅葉ばのむらごの錦きりたちけらし

梨笠嶽時雨

きる人のなし笠山ぞ久かたのしぐれのあめにぬるゝものは

雌坂瀧懸氷

うちさけてたらぬひならむ女坂路のたきにさらせる布はこほれど

白山頭銀雪

しら／＼し白山づみのおほみけし神世ながらの雪かあらぬか

○ 詠二樂亭十二景歌

福田美楯

芳野山花信

大和よりふきつたへたる春風のしるしごにほふ山さくらかな

藏王祠春葩

さきにはふ花のしらゆふかけてこそ山里人の神まつりせめ

虎狼山奇峯

皆人のかしこむ神のなたてにてみねにあやしき峯のいほへや

鴻門橋螢火

うきはしの千尋のたにく玉ぎりし玉や螢ごくひまごふらん

雲龍山採草

松がねにあきのかたこそたてくけたつのいぶきのまごふらむと

月桂潭印蟾

久堅の月のかつらの淵は瀬ごかはらじものと水てらすらし

謾々湍寒流

瀬をはやみいはほにむせふ水の音のあまりさむしご耳やこほれる

鞍打陽積雪

跡つけてごふ人あらはやへふれる雪につくみの音きかましを

祇陀寺老杉

ふるてらのなごりとたてるほこ杉の梢ひきしそおもひあかりぬ

鳥越坂晩雨

朝こえしさかとりは今かへるめりかきくらしふる雨のまかひに

側柏園鑊水

わきいづるしみづはこはに結ふなりこのね柏の木かげしづきて

一 樂亭松籟

山水にかよふ心の琴の音をたれきくしれと松風のふく

○

白山社にぬかつきて

藤本眞金

かげ仰く石のきさはし苔むして雲にしたぐる露さやかなり

舟岡にてよめりし

福田美楯

いつの世に舟見てしけむ山なれや霧のうなはら雲のしらなみ

○

白山

楚常、卯辰
集ノ稿者、
貞享五年、
ス

夕だちの雲はしらねのゆき消かな

道興准后

天照す神のはくそのみ山哉

宗祇法師

風かをる雪の白根を國の花

芭蕉庵桃青

白嶺へと雲吹かれ行枯野哉

秋日庵秋之坊

白山の雪さらくくと暑さかな

俳諧寺一茶

我山里に春をむかへて

春立や山家に入て袖の數

金子楚常

楚常か舊里を尋て

只寒し里のかたみの雪の松

生駒萬子

しら山にまうてふもこの川にあそふ

鮎やらむ柴つみ舟をさしこす間

桑門句空

ウラヤマシ
浮世ノ北ノ
山櫻、芭蕉

神無月朔日しら山にまふて

冬たつや此御神のことはじめ

白山に詣

立花北枝

火炬屋は菊の新酒の匂ひ哉

湊宮司英之

白山禪定の比

其霧にくらみつ晴つ地ごく谷

金子何之

しくれ月の中空白山に詣て翁の山さく

らの匂に小春の氣色をもごめし折から

越の初雪も又嬉しくて

初雪やこれも白根の山さくら

神風館梅路

吉野の花盛り都へ告る事三度なり

足まめや花の便の吉野僧

八十村路通

手取川

晝顔や其夜も知らず手取川

野盤子支考

杜火魚の石くふ腹や手取川

小築庵春湖

吉野三度櫻

千代やへん花の名高き青葉かな

矢田四如軒

白山暮雪

しら山や雪より下の夕霞

秋聲館有斐

登來同山

折取て霜に別るゝ紅葉かな

隨意亭守株

白山の社家に春を惜む

行春をつなぐ宮居の櫻かな

同

白山社頭

雪ひと重春の上着や菊理姫

無味齋梅嶺

金劔宮社頭

瑞垣のみつくしさや夕茂り

同

鶴來谷遊記附鶴來遺文抄終

昭和十一年七月廿五日印刷
昭和十一年八月五日發行

鶴來谷遊記
抄文原稿

版行部百三

發行所

石川縣知事可成場内
鶴來保勝會

石川縣知事可成場内

石川縣知事可成場内

石川縣知事可成場内

石川縣知事可成場内

石川縣知事可成場内

行春をつなぐ宮居の櫻かな

同

白山社頭

雪ひと重春の上着や菊理姫

無味齋梅嶺

金劔宮社頭

瑞垣のみつ／＼しさや夕茂り

同

鶴來谷遊記附鶴來遺文抄終

昭和十一年七月廿五日印刷
昭和十一年八月五日發行

鶴來遺文抄
三三三
部限定版

石川縣鶴來町新町二百二番地

編輯者 武禪定

金澤市長土塀通二十二番地

印刷者 林秀松

石川縣鶴來町役場内

發行所 鶴來保勝會

終